男女平等とジェンダーに対する保育者の意識[1)]

青　野　篤　子

要約：男女共同参画社会の担い手を育成すべき保育者が，男女平等やジェンダーに対してどのような考え方をもっているのか，また，性差や男女の特性をいかにとらえ，どのような保育方針をもっているのかを検討した。その結果，保育者は男女平等のための保育の意義を認めながら，男女の差異や女らしさ・男らしさを尊重した上で，男女を同等に扱うのが望ましいと考えていることが明らかになった。また，ジェンダー（・フリー）の知識がある人はそうでない人より，性差の社会構築性をより強く意識していることもわかった。
［キーワード：男女平等，ジェンダー，ジェンダー・フリー保育］

男女平等（共同参画）社会の実現は21世紀の最重要課題と位置づけられ，子育て支援，女性の就労支援，女性の理系能力の開発など，さまざまな施策が進められようとしている。しかし，何より重要なのは，男女平等社会の担い手である次世代の育成であり，そのためには乳幼児期からの教育を，ジェンダーの視点から見直すことが必要である。ここで，ジェンダーとは，一般に「社会文化的性」と訳されるが，「女性と男性についての社会的定義」の意味である（青野，2004）。また，ジェンダーの視点とは，性差をもたらす社会文化的要因を明らかにするような分析の枠組みだと言うことができる。

子どもの性別認識は乳幼児期に始まり，多くの子どもにとってそれは幼稚園や保育園への入園の時期と重なっている。このことからも，幼稚園や保育園は，幼児のジェンダー形成に大きな影響力をもつと同時に，ジェンダーを解消し男女平等社会を形成する上で重要な役割を担うものと考えられる（金子・青野，2005）。

教育や保育の場におけるジェンダー・バイアスの問題は，主に教育学や教育社会学の分野で議論され，とくに学校や幼稚園・保育園のシステムや管理との関係が強調されてきた（青野，2000）。すなわち，学校や幼稚園・保育園では，性別カテゴリーが集団統制の手段として用いられており，大人も子どももそういった日常的な営みを無意識のうちに受け入れているのである（森，1995；佐藤・田中，2003）。

日本では，1995年頃から，保育環境のジェンダー・バイアスを是正し，ジェンダーにとらわれない保育を実践するという意味で，ジェンダー・フリー保育ということばが使われ始め，そういった取り組みが徐々に始められた（0歳からのジェンダー教育推進事業，千葉県松戸市の「ふりーせる保育」など）。そして，2000年頃には，ジェンダー・フリー教育の実践も報告されるようになった（山梨県立女子短期大学ジェンダー・フリー教育プロジェクト研究

会，2001 など）。

ところで，「ジェンダー・フリー」ということばは，東京女性財団の教師向けガイドブック「あなたのクラスはジェンダー・フリー？」の普及を機に広く知られるようになったが，語源からしても，また現場の受けとめ方としても，「同じにする」ことがフリーであり平等であるなどの誤解をはらんでいたことは事実であろう（金子・青野，2004）。こういった問題は当初から指摘されており，ジェンダーを「性別により割り当てられた関係を問題とする分析概念」として用いた場合には，ジェンダー・フリーという表現では問題があり，固定化された性差観（ジェンダー・バイアス）を変革する教育環境をつくるという点で，「ジェンダー・バイアス・フリー」が妥当であるとの意見もあった（日野，2003）。また，現にある性差別やジェンダー，さらに作られた性差に敏感になり，それを是正するという意味で「ジェンダー・センシティブ（ジェンダーに敏感な視点）」ということばも提唱されていた（青野，2000；日野，2003；日野，2005）。しかし，当初から「ジェンダー・フリー」がめざしたものにそれらの視点は含まれていたのであり，以下に述べるようなバッシングを避けるために，このことばを取り下げる必要はないと考える。

近年，ジェンダー・フリー教育やジェンダー・フリーということばに対する批判が強くなっている。いわゆるジェンダー・フリー・バッシングである。この背景について本稿では触れないが，竹信（2006）や若桑（2006）などが参考になる。バッシング派は，ジェンダー・フリー保育は，トイレや着替えや体操競技などにおいて生物学的な差異や個々人の希望を無視して男女を画一的に扱うものであること，さらに女らしさや男らしさをも否定するものであると批判する。これを受けて，2005 年 10 月に男女共同参画に関する専門委員会が「社会的・文化的に形成された性別（ジェンダー）の表現等についての整理」とする文書を出し，ジェンダーという用語は性差や女らしさ・男らしさを否定するものでないことが明記された。さらに，同年 12 月に，第二次男女共同参画基本計画が閣議決定された際に，誤った解釈をもたらす可能性のあるジェンダー・フリーという用語は使用すべきでないと，別紙にて通知された（日本女性学会ジェンダー研究会，2006）。

青野・金子（2005）からも明らかなように，保育現場において，ジェンダー・フリー保育は十分に浸透しておらず，「ジェンダー・フリー行き過ぎ論」は不当な批判だと言えるが，このような逆風のなかで，先進的な取り組みをしていたところは後退を余儀なくされ，教育現場はジェンダー・フリー教育に対して消極的にならざるを得ない。事実，保育者へのインタビューと質問紙調査を行った金子・青野（2005）は，不合理な性区分が存在していても，保育者は園の伝統・慣習として従う傾向があること，子どもの個性を尊重することがそのままジェンダー・フリー保育につながるという認識が強く，ジェンダー・フリー保育そのものへの関心は全般に低調なこと，しかし，保育歴の長くジェンダーについて学習の機会があった人は関心が高いことを見出した。

そこで本研究では，近年のジェンダー・フリー・バッシングの中で，現場で保育にあたっ

ている当事者である保育士や幼稚園教諭（これらをまとめて保育者と呼ぶ）が，男女平等やジェンダー・フリーに対してどのような認識をもっているのかを明らかにしようとする。具体的には，男女平等や男女共同参画に対してどのような意見をもっているのか，また，ジェンダーないしジェンダー・フリーということばをどのように認識しているのか，さらに，ジェンダー・フリー・バッシングの対象となっている男女同室着替え等に対する意見などについて質問紙による調査を実施する。

方法

1．調査対象

福山市内の法人立の幼稚園20園，保育園44園の園長宛に，研究のための観察やデータ収集の協力を依頼した。このうち，保育者・保護者に対する意識調査に協力するという回答があった幼稚園２園・保育所５園の保育者と保護者に対して質問紙調査を実施した。幼稚園1園，保育園1園は園の都合で保護者は一クラスのみの実施となったが，その他は全クラスにお願いした。その結果，保育者94名，保護者428名から回答が得られた。回収率は全体で62.1％であった。今回は，保育者の結果を報告する。

2．調査対象者の属性

調査対象となった保育者の内訳は，女性が 88 名（年齢の範囲は 20～62 歳，平均は 35.4 歳，*SD* は 11.1 歳，）で，内 76 名が保育士，12 名が幼稚園教諭，男性が 6 名（年齢の範囲は 22～30 歳，平均は 26.17 歳，*SD* は 11.0 歳）で，内 5 名が保育士，1 名が幼稚園教諭であった。協力園が保育園に偏っていたため，圧倒的に保育士が多い結果となった。また，男性保育者の参入は始まったばかりであり，対象となった男性保育者は若年層に偏っている。

3．調査時期と調査方法

2006 年 9 月に，郵送留め置き調査を実施した。各園に調査票を郵送し，園長から保育者・保護者に対して調査の依頼をしてもらい，約 2 週間を限度に回収をお願いした。その後，園単位でまとめて返送してもらった。

4．調査内容

調査は，「保育・幼児教育と男女共同参画に関する意識調査」というタイトルで，以下のような依頼（教示）を行った。すなわち，男女共同参画社会の実現は21世紀の最重要課題とされており，家庭や学校にも期待が寄せられているが，男女平等の教育をめぐり様々な意見が対立していることから，この調査は，直接保育にかかわる保育者や保護者の意見を聞くことを目的としていること，また，調査主体は研究者であり，園が実施するものではないことを明記した。調査の内容は以下のとおりである。

(1) 幼児期の性差と保育・幼児教育について

① 女性と男性における表出的特性と道具的特性の重要度
② 幼児期（3歳～5歳）における男女の違い（差）についての認識
③ 性差の原因をどう考えるか（生得的か後天的か）
④ 保育園・幼稚園における男女別の扱いと関わり方
⑤ ジェンダーの視点からみた子育てや保育・幼児教育の方針
(2) 男女平等（男女共同参画）に関することがらについて
① 先進諸国と比べた場合の日本の男女平等進展度
② 男女共同参画（男女平等）社会の実現に対する幼児教育や保育の役割
③ ジェンダーということばを聞いたことがあるか
④ ジェンダーということばの意味をどのように考えているか
⑤ ジェンダー・フリーということばを聞いたことがあるか
⑥ ジェンダー・フリーということばの意味をどのように考えているか
⑦ 女らしさ・男らしさについてどのように考えるか
⑧ 女らしさ・男らしさはどの程度重要だと思うか
⑨ ひな祭りや鯉のぼりの行事を園で行うことについて
⑩ 園における男女同室での着替えやトイレの使用
⑪ 男性保育者が増えることをどう思うか，また，その理由
⑫ 男性保育者と女性保育者の役割の違い

結果と考察

幼稚園教諭と保育士，性別，ジェンダー（・フリー）ということばを知っているか（聞いたことがあるかどうか）否かで意識に違いが見られるかどうかに着目しながら，調査結果の概要を以下に示す。

1．幼児期の性差と保育・幼児教育について

(1) 性役割期待

保育者がどのような性役割期待をもっているかは，男児・女児に対する関わり方に大きな影響を与える。伝統的な性役割は，男性に対する道具的特性，女性に対する表出的特性であったと言えよう。そこで，本研究では，BSRI（Bem Sex Role Inventory; Bem, 1974）より，道具的特性として，「積極的な」，「スポーツ好きな」，「自信に満ちた」の3項目，表出的特性として，「子ども好きな」，「同情心が強い」，「話し方のおだやかな」の3項目を選び，女性と男性にとってどの程度重要かを5段階で回答を求めた。その結果を表1に示している。

表1からわかるように，表出的特性では「話し方のおだやかな」の1項目が女性により強く期待されているのに対して，道具的特性では，すべての項目で男性への期待が大きかった。

すなわち，伝統的に女性にふさわしいとされてきた表出的特性は女性と男性の双方に重要だとみなされているのに対して，男性にふさわしいとされてきた道具的特性はいまだに男性の方に強く期待されていると言えよう。また，男性にとっての「スポーツ好き」の重要性は，保育士（M=3.78，SD=0.86）より幼稚園教諭（M=4.31，SD=0.75）で高かった（$t(89)$=2.07，p<.05）。これには，保育園と幼稚園の活動内容の違いが影響している可能性もある。保育者の性別による差は認められなかった。

表1　女性と男性における道具的特性と表出的特性の重要性（N=91）

	積極的な	スポーツ好きな	自信に満ちた	子ども好きな	同情心が強い	話し方のおだやかな
女性	3.96(0.86)	3.43(0.94)	3.73(0.82)	4.22(0.76)	3.55(0.83)	4.00(0.88)
男性	4.24(0.85)	3.87(0.86)	3.97(0.81)	4.13(0.79)	3.56(0.82)	3.77(0.92)
t値	4.84***	6.46***	3.83***	1.81	0.21	3.38**

注．重要でない(1)～重要(5)の5段階評定，（ ）はSDを示す。** p<.01 *** p<.001

(2)　幼児期の性差

幼児期（3歳～5歳）の男女の違い（差）はどの程度だと思うか5段階でたずねた。また，男女差があるとすれば，その差はどの程度生まれつきのものだと思うか，後天的に身につけたものだと思うか，生まれつき(5)～身につけたもの(1)の5段階でたずねた。その結果を表2に表している。身体的能力，知的能力，活動性，感情の表し方のいずれも3未満であり，性差はそれほど大きくはなく，興味や関心の対象にはやや性差があるとみなされている（M=3.29，SD=1.13）。

性差が先天的か後天的かの判断においては，身体的能力のみが3以上の値を示し，先天的要素が認められている。逆に，興味や関心の対象には生後の経験がかかわっていると思われている。これらの判断において，幼稚園教諭と保育士との差，保育者の性別による差は認められなかった。

一方，ジェンダーに対する関心が性差のとらえ方に一部影響を与えていた。ジェンダーということばを聞いたことがある者（M=2.42，SD=1.05）は，そうでない者（M=2.89，SD=0.97）よりも知的能力の性差を小さくとらえており（$t(87)$=2.14，p<.05），聞いたことがある者（M=2.38，SD=1.16）は，聞いたことがない者(M=2.86，SD=0.97)より後天的だと考えている（$t(81)$=2.06，p<.05）。また，ジェンダー・フリーということばを聞いたことがある者（M=2.34，SD=0.91）はそうでない者（M=2.83，SD=1.12）よりも，知的能力の性差を小さくとらえており（$t(78)$=2.14，p<.05），ジェンダー・フリーということばを聞いたことがある者（M=2.29，SD=1.04）はそうでない者（M=2.87，SD=1.14）よりも，感情表現における性差

を後天的だと考えている（$t(76)=2.37$, $p<.05$）。

以上のように，保育者は，能力や気質と関連したものについては幼児期の性差は小さいと感じており，興味や関心の対象は，生後の経験を経てすでに幼児期に性差が現れているとみなしている。このことから，園児の興味・関心が性別に偏らず幅広いものとなるような保育の働きかけが必要だと考えられる。また，ジェンダーに対する関心が性差を小さく，また後天的なものだという認識をもたらすことから，保育者のジェンダーに関する学習が必要だとも考えられる。

表2 幼児期の性差についての認識（$N=92$）

	性差の大きさ	性差の原因
身体的能力	2.80(1.13)	3.48(1.12)
知的能力	2.60(1.04)	2.88(1.09)
活動性	2.89(0.94)	2.91(1.00)
感情の表し方	2.89(1.03)	2.61(1.14)
興味や関心の対象	3.29(1.12)	2.57(1.11)

注．性差の大きさは，小さいかほとんどない(1)～大きい(5)の5段階評定，性差の原因は(1)身につけたもの～(5)生まれつきの5段階評定。（ ）は*SD*

(3) 園での男女別の扱い

保育園・幼稚園における男女の区分や男女別の扱いを望ましいと思うか，望ましくないと思うか，5段階で評定してもらった。物的環境に関するものとして，「靴箱の配置などを男女別にする」，「男の子に青や緑，女の子にはピンクや赤の物品や教材を与える」，「女の子には人形，男の子には自動車など，違うおもちゃを与える」の3項目，働きかけに関するものとして，「『女の子だから』『男の子だから』というように，ほめ方や教え方が異なる」，「動物の世話は男の子，配膳は女の子というように，男女で異なる手伝いを頼む」，「園児を集合させるときに，男女別に並べる」の3項目を用意した。それらに対する評定結果を表3に示している。

表3からわかるように，全体的に数値が小さく，男女の区別や男女別の扱いは望ましくないと考えられている。幼稚園教諭と保育士の間の差はほとんどなかったが，ほめ方，手伝い，集合を平均した「働きかけ」の指標で有意差が認められた。すなわち，保育士は幼稚園教諭より男児と女児に対する異なる働きかけをより望ましくないと考える傾向があるということである。保育園では，性差のほとんどない乳児も預かっているために，全体を通して男女を

同じに扱う傾向が強くなるのではないかと考えられる。保育者の性別による差は認められなかった。

ジェンダーということばを聞いたことがある者(M=1.57, SD=0.79)はそうでない者(M=2.00, SD=0.97)よりも，おもちゃの与え方が男女で異なるのは望ましくないと考えている($t(67)$=2.21, p<.05)。また，ジェンダーということばを聞いたことがある者(M=1.42, SD=0.75)はそうでない者(M=1.89, SD=0.97)よりも，ほめ方が男女で異なるのは望ましくないと考えている($t(64)$=2.52, p<.05)。ジェンダー・フリーということばを聞いたことがある者(M=2.34, SD=0.91)はそうでない者(M=2.83, SD=1.12)よりも，色分けは望ましくないと考えている($t(79)$=3.15, p<.01)。また，ジェンダー・フリーということばを聞いたことがある者(M=1.15, SD=0.82)はそうでない者(M=1.98, SD=0.95)よりも，おもちゃの与え方が男女で異なるのは望ましくないと考えている($t(80)$=2.18, p<.05)。

このように，ジェンダー概念に関心をもつ保育者は，子どもをとりまく園の物的環境や教材，保育者の働きかけをジェンダーの視点から見直すことにより，不合理で無意味な男女の区別を望ましくないと考えていることがわかる。

表3　男女別の扱いの望ましさ

	幼稚園教諭（N=81）	保育士（N=13）	
物的環境	2.21(0.79)	1.88(0.79)	
靴箱の配置	2.23(1.09)	1.89(0.99)	
教材の色	2.38(0.87)	2.03(0.95)	
おもちゃ	2.00(1.00)	1.69(0.86)	
働きかけ	2.10(0.79)	1.74(0.54)	t=2.07, p<.05
ほめ方	1.77(1.09)	1.58(0.82)	
手伝い	1.54(0.97)	1.23(0.55)	
集合	3.00(1.29)	2.38(1.00)	

注．望ましくない(1)～望ましい(5)の5段階評定。（ ）はSD

(4)　子育てや保育・幼児教育の方針

子育てや保育・幼児教育の方針として，保育者がどのような考え方をもっているかを把握するために，5つの意見に対する賛否を，賛成(5)～反対(1)の5段階で回答してもらった。その結果を列挙すると，「男女を同じように扱って，男女の違いや差が生じないようにすべきである」(M=3.32, SD=1.07)，「「できるだけ男女は同じように扱うのがよいが，男女の身体的な違いには配慮すべきである」(M=4.46, SD=0.83)，「女の子は女らしく，男の子は男らしく

育つように配慮すべきである」（*M*=2.69, *SD*=1.03），「社会的につくられた男女差をなくすために，積極的な働きかけをすべきである」（*M*=3.46, *SD*=0.95），「子どもの自主性や子どもの個性を最優先すべきである」（*M*=4.40, *SD*=0.85）となる。保育者の性別，幼保の別，ジェンダー（・フリー）ということばを知っているか否かによる差はなかった。

上記の平均値から判断すると，保育者は全体的にみて，女らしさ・男らしさにとらわれる必要はないが，身体的な違いや個性を尊重すべきだという方針をもっていることがわかる。一方，性差をなくすような働きかけが必要だという意識は強くない。この調査結果からも，バッシング派が唱える「性差をなくすジェンダー・フリー」論は当を得ていないと言える。しかし，性差の多くが社会的に形成されるというジェンダーの視点に立てば，幼児期にすでに出現している性差（たとえば，興味や関心の対象は幼児期にすでに男女で異なるという認識を保育者自身がもっていることは前述の通りである）を解消する試み，性差をつくらない試みが日々の保育の中で必要とされていると考えられ，本当の意味でのジェンダー・フリー保育への取り組みが必要ではなかろうか。

2．男女平等（男女共同参画）とジェンダーについて

(1) 男女平等（男女共同参画）について

今の日本は，他の先進諸国と比べて，社会的な面での男女平等（男女共同参画）がどの程度進んでいると思うか，あるいは遅れていると思うかを，進んでいる(5)～遅れている(1)の5段階で回答を求めた。全体の平均（*SD*）は，2.26（0.92）であった。評定における男女差，幼保の差，ジェンダーの知識による差はなく，保育者は全体として，日本の男女平等はどちらかと言うと遅れているという印象をもっている。

また，男女共同参画（男女平等）社会を実現するにあたり，幼児教育や保育はどの程度影響力をもつと思うか，影響力(5)～影響力がない(1)の5段階で回答を求めた。全体の平均（*SD*）は，3.79（0.92）であった。評定における男女差，幼保の差，ジェンダーの知識による差はなく，保育者は全体として，幼児教育や保育の重要性を認識していると言える。

(2) ジェンダーとジェンダー・フリー

ジェンダーということばを聞いたことがあるかどうかを，2件法でたずねた。「聞いたことがある」が54名（57.4%），「聞いたことがない」が37名（39.4%），無回答が3名（3.2%）であった。聞いたことがある者に対して，ジェンダーということばの意味をたずねたところ，33名から回答があり，無回答が15名，わからない（意味は考えたことがない）が6名であった。このことから，ジェンダーということばは保育関係者に十分知られているとは言えない状況が浮かびあがってくる。得られた自由回答の種類から，単なる性差として解釈しているもの，社会文化的に形成された性差ととらえるもの，ジェンダー・ロール（性役割）や女らしさ・男らしさの意味に解釈しているもの，性差別のニュアンスを含むもの，意味が間違

って解釈されているもの，の4つに分類した（表4）。

ジェンダーということばの意味や定義は研究者によってもさまざまであるが，染色体や遺伝子によって決定される生物学的性（セックス）に対して，社会や文化の中でつくられる性として位置づけられる（セックスとジェンダーとの影響過程については合対立する立場がある）。青野（2004）は，ジェンダーを，社会的定義の側面，役割の側面，地位の側面，実行の側面に分類している。すなわち，ジェンダーは女性と男性についての社会的取り決めであるが，それが男女のふさわしい役割を規定し，さらに地位の差をもたらすということである。

表4からわかるように，単純に性差や男女の違いと回答した者もかなりいるが，何らかの回答をした者のほぼ半数が，ジェンダーの社会的意味を考慮した回答をしている。従って，ジェンダーのことばは外来語でわかりにくいという批判もあるが，このことばを知っている現場の保育者はその意味をかなり正確に理解していると言えるのではないだろうか。ジェンダーとジェンダー・フリーの意味を取り違えているのではないかと思われる回答もあったが，これはジェンダーのしめつけから解放されることの重要性を表現したもので，あながち間違いとは言えない。しかし，ジェンダーを生物学的な要素とみなしたり，個人の中にあるものとみなす解釈は，本来のジェンダーの意味から逸脱したものと言えよう。

表4　ジェンダーということばの意味

回答の種類	具体的な回答
性差	「性」，「(男女の) 性差」，「男女の違い・差」，「男女差」，「性の特性」など（11名）
文化社会的性差	「文化的・社会的な性差」，「文化的・社会的な男女の違い」，「社会的性差」，「社会的・文化的性別」（5名）
ジェンダー・ロール	「男性は男性らしく，女性は女性らしく言動すること」，「男性は男性らしく，女性は女性らしく，社会的に，家庭の中で，それらしい振る舞いをすること」，「男・女という考え方」，「女性はこうであるべき，男性はこうであるべきという考え方」，「役割」，「男女の垣根」，「男は男の役割，女は女の役割があるということ」，「男は仕事，女は家事・育児という考え方」，「生まれつきの性差によって，男女の役割を固定して考えること」（9名）
性差別	「性差別，固定観念化した考え」，「女性差別」，「男女差別」（3名）
誤解	「人間本来の解放，新しい時代をひらく性差を考える営み」，「フリー，どちらともいえない」，「自分らしさ」，「男女という扱いではなく，個々を大切にすること。しかし，男女の特性をふまえて，すべてを同じにすることは望ましくない」，「男だから，女だからなどというような，人間の中にある，男らしさ，女らしさの男

	女の差の考え方」,「男は男らしく，女は女らしくあるべきと考えること。もしくは，男女間にある生物的な個体差」（5名）

では，ジェンダー・フリーということばについてはどうだろうか。調査の結果，聞いたことがある者が40名（42.6.4%），聞いたことがない者が42名（44.74%），無回答が12名（12.8%）であった。

聞いたことがある者に対して，ことばの意味を具体的に記述してもらった。無回答，わからない，あいまいな回答を合わせた19名を除く21名の具体的な回答内容を表5に整理した。回答は多岐にわたっているが，その意味内容から，「男女を区別しない」，「個性を尊重」，「男女の固定観念にとらわれない」，「男女平等」，「男女差にも配慮した平等」，「誤解されたもの」の5種類に分類した。男女を区別しないという考え方をする者は少なく，ジェンダー・フリーは「何でもかんでも男女一緒」にするので問題があるというバッシング派の批判は，保育者の意識に関する限り見当はずれなものだと言えよう。むしろ，現場の保育者には，ジェンダー・フリーを，性別にとらわれず個性を尊重するもの，男女の固定観念にとらわれないものという解釈を与えている者が多い。

ジェンダー・フリーは，字義通り解釈すればジェンダーから自由という意味であるが，すでに述べたように，ジェンダー・フリーということばには，すでにつくられた性差を見直したり男女の不得意な能力を伸ばすような積極的な働きかけを可能にするような「ジェンダーに敏感な視点」，あるいは，男女の違いを超えたところで「男女平等をめざす」という理念ないし目標を含んでいる（青野，2000）。こういった意味内容を含む回答は少数であったことから，やはりジェンダー・フリーということばも，ことばが一人歩きをしていて，その真意が現場の保育者には理解されていない現状を指摘することができよう。

表5 ジェンダー・フリーということばの意味

回答の種類	具体的な回答
男女を区別しない	「男女区別なく」,「性別差（回答者が記述したまま）のないこと」,「男女の個性を決め付けないこと」「性差をなくす」,「男女差がない」（5名）
個性を尊重	「男女関係なく，一人の人間として言動すること」，「男女関係なく，人として考えていく。接する」，「生まれつきの性差にとらわれず，その人らしさを活かしていくこと」，「自分が持っている能力を最大限に活かせる機会」，「“男らしさ”，“女らしさ”の男女の差を平等にし，“個人のらしさ”という考え方」，「性別にとらわれない，こだわらないこと」（6名）
男女の固定観念に	「『性』の特性に関係なく，『～らしい振る舞い』，『～のようにする』という固定観念

とらわれない	にとらわれないこと」,「性に対する自由な考え方」,「社会性差による偏見や押し付け（男だから・女だから～しなければならない）から自由になること」,「男・女にこだわらない。男・女の固定概念にとらわれないこと」,「男の子だから青，女の子は赤，ピンクなどの概念でなく，自由を表わす（性にとらわれない自由）」（4名）
男女平等	「男女差別をしない考え方」,「男女平等」,「男女の性差を取り払って，平等に」（4名）
男女差にも配慮した平等	「根本的に男女は同一であり，差別があってはならないが，体や心の仕組みが違うので，それぞれがしっかりと理解されての社会的合意を持たなければならない」（1名）
誤解	「男女の格差」（1名）

(3) 女らしさ・男らしさ

「女らしさ・男らしさ」ということばは非常に多義的であり，とくに最近は，ジェンダー概念との関係において，ジェンダーと同義なのか，ジェンダーと重なりはあるが異なるものなのか，生物学的性（セックス）に起因する両性の特性であって社会的性としてのジェンダーとは一線を画するものなのか，様々な考え方が対立している。バッシング派が，ジェンダー・フリーは「女らしさ・男らしさ」をなくす過激な思想だと批判するとき，「女らしさ・男らしさ」を生物学的な性に起因するものであり，なくすことはできないものとみなしているのだと言えよう。しかし，私たちが日常的に使っている「女らしさ・男らしさ」には，「女らしくしなさい」と子どもをたしなめる場合に見られるように，規範的な意味が強く，これはジェンダー・ロールとほぼ同義である。従って，このことばをめぐる議論は，ことばの定義をしない限り不毛だということになるのではないだろうか。

このように議論の的になっていることばを，現場の保育者がどのようにとらえているのかを知ることは意味のあることだろう。この調査では，「女らしさ・男らしさ」が社会的に決められたものなのか，生物学的によってもたらされるものなのかを質問している。その結果，「女性・男性にふさわしいこととして，社会的に決められたもの」を選んだ者が7名（7.4%），「生まれつきの男女の違いから自然に現れてくるもの」を選んだ者が44名（46.8%），「その両方を含むもの」を選んだ者が33名（35.1%），その他が4名（4.3%）であった。保育者の約半数が，「女らしさ・男らしさ」を女性と男性の生物学的な違いから生み出されるものだと考えており，約三分の一が生物学的な要因と社会的な要因の両者が作り出すものだと考えている。社会的に決められたものだと考えるのは少数であった。

これに関連して，女性にとっての女らしさ，男性にとっての男らしさはどの程度重要か，重要(5)~重要でない(1)の5段階で回答を求めた。全体の平均（SD）は3.35（0.97）で，わずかに重要な方に傾いている。また，女性保育者（M=3.41，SD=0.92）と男性保育者（M=2.50，SD=1.23）の評定には有意差があり（$t(87)=2.28$，$p<.05$），男性保育者の方が女らしさ・男らしさにとらわれない解放的な考え方をもっている。これは，保育という職域を選択した男性

保育士たちの革新的な考え方を反映したものかもしれない。しかし，男性保育士はわずか 6 名であり，標本数の限界があることは否めない。

なお，幼稚園教諭か保育士か，ジェンダー（・フリー）ということばを聞いたことがあるかどうかで，回答に差は見られなかった。

(4) ひな祭りや鯉のぼりの行事を園で行うこと

バッシング派の主張の一つに，ジェンダー・フリーは伝統文化を否定するという意見がある。現実に，伝統的な行事や慣習の中には，女性を排除するもの（相撲や登山など）や，家父長制を象徴するもの（ひな祭りなど），また，男性と女性の序列を表すもの（鯉のぼりなど）があり，ジェンダー・フリーの観点から見直しが必要なものは少なくない。ただ，2005 年に実施された文部科学省の「学校での男女の扱い等に関する調査」では，男女平等の観点から好ましくないと判断し，ひな祭りや鯉のぼりの行事を取りやめていたのはわずかに 46 園（0.87%）であった（世界日報，8 月 5 日社説）。

ところで，保育者は園で行われるこのような伝統行事をどのように考えているのであろうか。質問が挑戦的なニュアンスを与えないように，「ひな祭りや鯉のぼりの行事を行うことについては賛否両論があるが」と断った上で，その他を含む 4 つの選択肢からもっとも近いものを選んでもらった。その結果，「伝統文化として大切にすべきである」を選んだ者が 53 名（56.4%），「男女が同じように参加する行事として行えばよい」を選んだ者が 32 名（34.0%），「男女差や男女の役割を強調するのでよくない」を選んだ者はいなかった。また，「その他」を選んだのが 2 名（2.1%），無回答が 7 名（7.4%）であった。

このように，伝統文化に否定的なものは皆無であり，伝統文化を大切にするという意見が多数を占める。しかし，伝統をそのまま受け継ぐのではなく，一方の性を排除することのないような配慮が必要だという考え方が一定数を占めている。

(5) 園における男女同室での着替えやトイレの使用

バッシング派は，小学校などで男女同室の宿泊や着替えが野放しになっているのもジェンダー・フリー教育の行き過ぎの結果だという。実際にそのようなことがどの程度行われているのであろうか。上述の調査によると，林間学校や修学旅行などでの男女同室宿泊が，小学校全体で 345 校（1.55%），水泳の同室着替えは，小学校 4 年生で 823 校（3.7%），体育の同室着替えは中学校全体で 757 校（7.49%）などとなっている（世界日報，8 月 5 日社説）。ちなみに，文部科学省は，子どもの心身の発達には個人差があり，羞恥心を感じる子どももいるはずであるから，原則として男女別々にするように都道府県教委などを通じて呼びかけるとしている（asahi.com，6 月 30 日）。

この問題について，保育者はどう考えているのであろうか。保育園や幼稚園での男女同室着替えやトイレの使用についてどう思うかを，その他を含む 4 つの選択肢から選んでもらった。その結果，「幼児期には男女がほとんどないので一緒でかまわない」を選んだ者が 48 名

(51.1%),「幼児期でも個人差があるので,できれば男女別にすべきである」が 8 名 (8.5%),「男女差に気づかせる意味でも,幼児期は一緒の方がよい」を選んだ者が 19 名 (20.2%),その他が 7 名 (7.4%),無回答が 12 名 (12.8%) であった。

以上のように,幼児期では着替えやトイレの使用は男女一緒でよいとの回答が多数を占めている。しかし,その約半数が,性差がほとんどないから一緒でよいと考え,約半数が性差に気づかせるためと考えている点は興味深い。おそらく,その両方が現実に保育に携わっている保育者の実感ではないだろうか。幼児期は心身両面において性差はそれほど顕著ではないが,子どものジェンダー・アイデンティティは 2 歳から 3 歳にかけて芽生え始める。そこで,すでに性のカテゴリーや女性と男性の特徴には関心が生じており,この時期の子どもにとって,男女の類似性と相違というものに気づかせる機会も必要ではないかと考えられる。もちろん,少数であるが,個人差への配慮が必要という意見もあり,一律に同室にすべきだとか,分けるべきだという考え方は望ましくない。

おわりに

本研究は,フェミニズムに対するバックラッシュの主流化と男女共同参画行政の後退という時代状況において,次世代の育成に重要な役割を果たす幼児教育・保育の担い手である保育者の男女平等観やジェンダー観を明らかにし,今後の指針を見出すことを目的として行われた。

調査結果は以下のようにまとめることができる。保育者は,男女平等の進展を願い,幼児教育や保育が果たす役割も認めている。保育者は,身体的な違いには配慮した上で男女を分け隔てなく扱うのが良いと考えている。また,幼児期の性差はほとんどないが,生後の経験を経て興味や関心の向け方は男女でかなり異なると信じられている。さらに,男性にはスポーツ能力がより強く期待されるなど,それぞれの性にふさわしい特性があるとされ,それらは女性と男性で自然に現れてくるものだとみなされている。保育者がめざす保育を一言で表現するならば,個性や自然発生的な性差を尊重しながら,できるだけ男女を分け隔てしない保育であろう。

一方,保育者のジェンダー (・フリー) についての理解は十分とは言えない。すなわち,ジェンダーの社会構築性,ジェンダー・フリーが含むジェンダー・センシティブな視点は非常に希薄だということである。このことが,子どもの性差の見方や保育目標とすべき大人像のイメージをやはり伝統的なものにとどめ,気づかないうちに幼稚園や保育園で日々性差の形成に加担することになっているのではないだろうか。

引用文献

青野篤子 (2000). フェミニズムと教育 児童心理学の進歩 2000 年版 金子書房 pp.123-147.

青野篤子 (2004). 女性とは？男性とは？ 青野篤子・森永康子・土肥伊都子 ジェンダーの心理学ー「男女の思いこみ」を科学するー ミネルヴァ書房 pp.1-23.

青野篤子・金子省子 (2005). ジェンダー・フリー保育の現状と課題ー園の観察と保育者・保護者インタビューをもとにー 松山東雲女子大学人文学部紀要, **13**, 17-32.

asahi.com : 男女同室の身体検査, 小 1 で 16% 文部科学省「別々に」ー暮らし http://www.asahi.com/lif/update/0630/008.html

Bem, S. (1974). The mesurement of psychological androgyny. *Journal of Counseling and Clinical Psychology*, **42**, 155-162.

ゴロンボク, S. , & フィヴァッシュ, R. 小林芳郎・龍野揚三 (訳) (1997). ジェンダーの発達心理学 田研出版.

(Golombok, S., & Fivush, R. 1994 *Gender development*. New York: Cambridge University Press.)

日野玲子 (2003). 「ジェンダー・フリー教育」を再考する ー必要な状況定義的理解と具体的課題 季刊女も男も, **95**, 21-23.

日野玲子 (2005).「ジェンダー・フリー」教育を再考するー担い手の立場から, ジェンダーに敏感な教育を考える 木村涼子 (編) ジェンダー・フリー・トラブル 白澤社 pp.95-115.

金子省子・青野篤子 (2004). 保育所・幼稚園におけるジェンダーをめぐる課題 愛媛大学教育学部紀要第一部, 教育科学, **50(2)**, 131-139.

金子省子・青野篤子 (2005). 保育にかかわる保育者のジェンダー観について 日本保育学会第 16 回大会発表論文集, 244-245.

森繁雄 (1995). 幼児教育とジェンダー構成 竹内洋・徳岡秀雄 (編) 教育現象の社会学 世界思想社 pp.132-149.

日本女性学会ジェンダー研究会 (編) (2006). 男女共同参画／ジェンダーフリー・バッシングーバックラッシュへの徹底討論ー 明石書店.

佐藤和順・田中亨胤 (2003). 幼稚園におけるジェンダー・フリー・プログラムに関する研究 兵庫教育大学教育実践学論集, **4**, 21-32.

世界日報 8 月 5 日社説「男女共同参画／混合強いる理念の是正を」 http://www.worldtimes.co.jp/syasetu/sh060805.html

竹信三恵子 (2006). やっぱりこわい？ジェンダー・フリー・バッシング 木村涼子 (編) ジェンダー・フリー・トラブル 白澤社 pp.19-34.

東京女性財団 (1995). 若い世代の教師のために あなたのクラスはジェンダー・フリ

ー？
山梨県立女子短期大学ジェンダー・フリー教育プロジェクト研究会　(2001). 乳幼児期のジェンダー・フリー教育ー問題提起と地域での実践に向けて(1), (2)　山梨県立短大紀要, **34**, 101-134.
若桑みどり　(2006). バックラッシュの流れ　若桑みどり・加藤秀一・皆川満寿美・赤石千衣子（編著）「ジェンダー」の危機を超える！ー徹底討論！バックラッシュー　青弓社 pp.83-123.

注

[1] 本研究は, 平成 18～20 年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C) (課題番号 : 18410240 代表 : 青野篤子) の助成を得て実施された研究の一部である。また, 調査に協力していただいた保育所・幼稚園の先生方・保護者の方にお礼申し上げます。

Childcare workers' attitudes toward gender-equality

Atsuko Aono

This study examined how childcare workers expected to bring up the actors in gender-equal society think about the equality between the sexes, gender, and the policies of childcare. Findings showed they acknowledged the importance of egalitarian childcare, respecting gender differences or femininity and masculinity to some extent. It is also found that the childcare workers who knew the word "gender" or "gender free" had more liberated opinions.
[Key words: equality between the sexes, gender, gender free childcare]